第一章　かどわかし

朝焼けの怪

江戸深川は浄心寺裏の山本町で、ひとりの娘がこつぜんと姿を消した。それがそもそもの事の始まりだった。

消えた娘の名はあきという。今年十七になる下駄屋のひとり娘で、半月後には浅草駒形堂近くの料理屋へ縁付くことが決まっている身の上だった。想い想われて定まった縁談で、本人も花嫁衣装を着るその日を心待ちにしていたのに――

おあきが姿を消したのは、朝焼けの濃い春の朝のことだった。

その日、下駄屋のあるじであり、おあきの父である政吉は、長い夜のあいだじゅう、ひどく嫌な夢にうなされ、眠る前よりもくたびれたような心持ちで寝床を離れた。毎朝日の出前に起き出して、仕事場へ足を運び、神棚をおがんで道具をいじってからでないと朝飯がしっくり喉を通らないという性分の政吉は、夢の名残でしくしく痛む頭をおさえて、仕事場へと

ゆっくり階段をおりていった。

政吉を痛めつけた夢は、目覚めたあともなお、彼を震えあがらせるだけの力を持っていた。生乾きの下帯を身につけてしまったかのような気色悪さが、背中から腰のあたりにへばりついている。階段を踏みしめる膝が、一歩ごとに頼りなく震えた。

どうもいけねえと、政吉は思った。このところ、柄にもなくあっちこっちへ気を遣いづめの暮らしをしてきた。それがまずいんだろう。きっとそのせいだろう。

ひとり娘のおあきを嫁に出すことが、寂しくないわけはない。縁組が決まって以来、日に日につややかさを増してゆく娘の立ち居ふるまいや、かがやくような笑みを浮かべる桜色の頬を見るたびに、悔しいような腹立たしいような、胸の奥の急所を指先でぐいと突かれるような思いも味わってきた。

今のような一本立ちの職人になり、狭いけれど自分の店を持つことができるようになるまでの苦労ときたら、本当に言葉にはできないほどだ。思い出話をしていると、いい歳をして今でもふと涙ぐんでしまうほど、それは辛いことの連続だった。そんな暮らしを乗りきってくることができたのは、一にも二にも、娘のおあきがいたからだ。

そのおあきがいってしまう。手元からいなくなってしまう。もう政吉が守ってやることも、喜ばしてやることもできなくなる。そりゃあおあきが惚れた男だろうけれど、政吉から見たらとんだ青二才だ。あんな男に大事なおあきを預けることなど、俺にはとうていできねえと、腹の底から大波がこみあげてくることもしばしばだ。

だが政吉はこれまで、そういう気持ちが顔や態度に出ないように気をつけてきた。ぎゅうと抑えつけた気持ちがあふれ出そうになるのを、奥歯を噛んでこらえてきた。それが裏目に出て、妙な夢になったのかもしれない。

夢のなかで、政吉はおあきを殺そうとしていたのである。

（いったい、親父が娘をあやめようとするなんてことがあるもんか）

雨戸をたてきった暗い廊下を歩きながら、政吉はいく度となく首を振った。

昨夜の夢のなかで政吉は、どことも知れない大きなお屋敷のなかにいた。呆れるような広い座敷の真ん中に、ひとりでぽつんと立っている。そういうところから始まった。

夢の政吉は、なにやらひどく心急ぐ気持ちになっていた。誰かを追いかけているらしい。その誰かは、このお屋敷のなかにいる。だから政吉は動き出した。ほとんど走るようにして、目の前にある豪奢なふすまに手をかけた。

ぴしりんという小気味好い音を立て、ふすまは左右に開いた。そこにはまた、うしろの座敷と同じような広い畳の海が広がっている。政吉はそこを飛ぶようにして横切る。次のふすまを開ける。するとまた座敷が広がる。

次から次へと座敷を走り抜けながら、政吉はふすまを開けてゆく。だんだん気が急いてくる。そのうち、頭の上のほうから大勢の人が笑い騒ぐような声が聞こえてくることに気がつく。つと目をあげると、声のぬしは、ふすまの上の欄間に彫りこまれた、あでやかな観音さまであるとわかった。

手のこんだ透かし彫りで形をつくられた観音さまは、ひとつの座敷におひとりずついて、それぞれに違う姿勢、違う声音、違う笑顔をしておられるが、皆一様に、政吉をさして笑っている。

（ほら、あれをごらん）

ひとつの欄間から次の座敷の欄間へと、観音さまたちがささやき交わす声が聞こえる。

（おかしいねえ、ああして探している）

（探している）

（でも見つかるものかい）

（見つかるわけがない）

夢のなかの政吉は、ありがたい観音さまが、あんな下卑た声で笑いなさるわけはないと考える。あれはきっと、もののけだ。もののけが観音さまのお姿を借りて、俺をたぶらかそうとしているんだ――

汗をかき息をきらして走り続け、ふすまを開けては次の座敷に転がり込みながら、政吉は死に物狂いで自分に言い聞かせた。夢のなかで走りながら、これは夢だ、夢だ、夢にちがいねえと、必死に自分に言い聞かせた。

だが座敷は延々と続く。開けても開けてもふすまは途切れず、どこかへたどりつくわけでもない。欄間の観音さまたちの笑い騒ぐ声はどんどん高くなる。まるで飯盛り女かなにかのようだ。優雅な衣から白い腕をのぞかせ、政吉をさし招くようにして笑い続ける。

ああその肌のなんと美しいことだろう。その目になんと色香のあることだろう。
まるで――まるで――おあきのようだ。
そのとき政吉は、夢のなかの我と我が手に、のみを握りしめていることに気づいた。
俺はどうしてこんなものを持っているんだ？　政吉は夢のなかで絶叫した。
すると、頭の上を次々と通り過ぎてゆく観音さまたちが、口々に答える。
「それはどうしてかって、おまえが娘をあやめるためさ」
「おあきをあやめる？　この俺が？」
「そうとも、そうとも」
「俺がおあきをあやめるわけがねえ。おあきは俺の可愛い娘だ」
政吉は言い返す。なんとかして立ち止まり、頭の上の観音さまを、まともに見据えて口ごたえしてやろうと思うのだが、どうしても足が止まらない。息が苦しく、喉がひゅうひゅう鳴っているのに、それでも走り続けずにはいられない。
そこへ観音さまたちの声が降ってくる。
「おまえはおあきをあやめる」
「可愛くともあやめる」
「きっとあやめる」
「あやめてしまわぬわけがない」
「違う、違う、違う！」と、政吉は叫ぶ。

この続きは、書籍でお楽しみください。
◎注意
本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。
個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。